

宇野秀彌の新資料とその生涯について

山田 恭子

1. はじめに

宇野秀彌^{うのひでや}は聖学院中学校高等学校¹の歴史担当教員で、『朝鮮文学試訳』全七〇巻を刊行し、多くの朝鮮古典作品を翻訳した人物として知られる。現在はその大部分である十六巻から七〇巻までが、国立国会図書館に収められている。²

その翻訳について最初に着目したのは梶井陟で、戦前には古典の翻訳作業が朝鮮人の手による物が多かったが、日本人の手による翻訳という点、独学で朝鮮語を学び、自費出版というハンディを背負いながら原典に忠実な点、丁寧な註と解説がつけられている点で高く評価されている。³

筆者は以前、宇野秀彌『朝鮮文学試訳』について言及し、⁴その折、宇野秀彌の刊行物に記された住所⁵から、宇野秀彌の御長女である今井美和氏と連絡をとり、『朝鮮文学試訳』全七〇巻の目次を印刷したものと、国立国会図書館には収められていない一巻から十五巻の朝鮮短編小説とされる近代短編小説や歴史小説の翻訳部分をいただいた。⁶またその際、今井美和氏は、宇野秀彌が著作した新資料として、①一九八二年三月刊行の『本郷森川町 幼き日々の記憶より』、②一九八三年三月刊行の『滝野川 幼き日々の記憶より』、③一九八四年三月刊行の『続本郷森川町 幼き日々の記憶より その3』、④一九八八年六月刊行の『夏羽織 母菊栄を偲んで』を提供された。⁷これらは宇野秀彌が自ら製本した私家版であり、本稿で初公開されるものである。その内容をみると、宇野秀彌が本郷森川町で暮らした幼い頃の追憶や、聖学院中学校高等学校に程近い滝野川での生活が綴られており、なぜ宇野秀彌が聖学院中学校高等学校に赴任したのか、そして宇野秀彌の人となりを知る上で、大変重要な資料であることが分かった。また今井氏より提供された資料の中には、朴泰圭氏の博士論文⁸もあり、その内容から、朴泰圭氏が宇野秀彌訳の『銀世界』を参考にしたこと、宇野若葉夫人との手紙のやりとりがあり、宇野秀彌が聖学院在職中に教えた数人の韓国人生徒との交流をきっかけに作品の翻訳に専念するようになったことを知った。⁹

そこで本稿では、以上の新資料の①から④の概要を紹介する。新資料の内容は宇野秀彌が韓国文学翻訳を行った舞台となる聖学院中学校高等学校に就職するまでの歴史を物語るものである。また聖学院中学校高等学校で宇野秀彌の教え子かつ元同僚であった桑ヶ谷森

男氏¹⁰を通じて、同じく聖学院中学校高等学校の教員であった真田幸男氏¹¹から提供いただいた聖学院中学校高等学校「学校だより」にある宇野秀彌の寄稿記事¹²など、今まで集めてきた資料も参考にしながら、宇野秀彌の生い立ちの年表をまとめた。これらは日本人として多くの韓国文学の翻訳に携わった宇野秀彌の人となりを知る上で大いに役立つであろう。最後に御長女の今井美和氏、桑ヶ谷森男氏、真田幸男氏から提供いただいた貴重な写真も公開する。『朝鮮文学試訳』の翻訳がどのような理由で成立していったのかを考える上で、これらの一連の資料を基に宇野秀彌の生涯を明らかにすることは大変意義あることだといえよう。

2. 新資料の概要

新資料四点は、宇野秀彌が幼い頃、母と一緒に暮らした東京都本郷森川町の様子がよく描かれている。昭和五八年（一九八三）秋、母菊栄が八五歳で記した三つの文章も入っており、宇野秀彌の祖父母についても詳細が分かる内容となっている。更に重要なことは本郷森川町にあった宇野家が、関東大震災で聖学院の発祥地である東京都北区滝野川に非難したこと、弟である久彌が赤痢にかかり治療費のため借金をした挙句、昭和恐慌で家業の呉服屋が倒産し、次伯母ツネの夫で、実質的に宇野秀彌の父であった橋本省三が久彌の養父になり、秀彌が久彌と共に滝野川に住んでいたことである。新資料ではこの宇野秀彌の幼少期から小学生時代の話が主に綴られ、秀彌が母と過ごした貴重な時期であると同時に、滝野川での生活が、後の聖学院中学校高等学校就職へと繋がっていることが分かる。また経済的な理由で母と離れた後も、親代わりとなった祖母と伯母が敬虔な浄土真宗であったことから、聖学院に就職しながらも秀彌が最後までクリスチャンにならず、仏教徒を貫いたことが綴られている。その内容をまとめて紹介すると以下ようになる。またその目次を囲みで記した。

① 宇野秀彌『本郷森川町 幼き日々の記憶より』一九八二年三月刊行（私家版）

黒田家のこと

宇野秀彌の父方の祖母の実家である黒田家とその姻戚にあたる内田家について記されている。

黒田家から嫁いできた宇野ハツ、ハツの父で無血開城の際、上野彰義隊であった黒田家の当主の話。

ハツの子供の長伯母宇野イネ、父の従妹で内田家に嫁いだハツの姪のテフの話など。

三河屋呉服店

本郷森川町にかつて存在した宇野呉服店や宇野秀彌の就学前の話。

三河屋宇野呉服店はかつて繁盛しており、電話もあった。元は森川町の三丁目寄り（現、本郷六丁目）にあったが、明治十年の中頃に類焼に遭い、本郷三丁目に移る。秀彌の小学校低学年ごろ店舗はなく、父が得意先を回って商いをしており、店と居住空間を仕切って、店の方はパラダイスという洋食屋兼高級食料品店に貸していた。その家賃や舶来食品をもらって生活していた。

宇野家は森川宿に店を持っていたが火災の後に森川町一番地に借地して引っ越し、地主の本多家が強制的に土地を売りつけたため、次伯母ツネの夫の橋本省三がそこを買い取ったとされる。

曾祖父宇野岩蔵、祖父安太郎（明治三十九年没）の代までは律儀に商売をしており、時折西洋人の客も来て繁盛していた。明治二十三年頃には岩蔵の喜寿祝いの家族写真があり、岩蔵の三人の息子とそれぞれの家族、安太郎には土族の黒田家から嫁を迎えて一族を率いている姿が写っている。当時は経済的に余裕があったらしく、伯母のイネやツネは日清戦争以前に流行した明清楽¹³をよくした。しかし、祖父安太郎の晩年には店は仕舞われていた。祖母ハツとの不仲による別居や息子である父亥之助の無能さも店を仕舞う原因であった。父亥之助は本郷区誠之尋常小学校（四年間）卒業後、大丸呉服店に奉公した。ここで酒や遊びの道を教えられたとされる。昼間から酒を飲んで算盤を枕に昼寝をしていた。さらに昭和三年、金融恐慌の際には渡辺銀行がつぶれ、父亥之助の借金財政が破綻を来した。秀彌の就学前に森川町の家を他人に貸して下北豊島郡滝野川町字西ヶ原（現北区西ヶ原三丁目）に引っ越し、店を持ち商売をしたが半年で閉められ、また元の森川町に戻った。

大学

本郷森川町と東京大学付近の当時の様子が書かれている。

本郷森川町は大学の門前町であり、下宿屋の町であった。宇野家も素人下宿といって二階の八畳に下宿人を住まわせていた。下宿人の学生の中で、後に工学博士で北海道炭鉱汽船会社の技師長の永雄節郎とは親戚同様の仲になり、昭和十三年祖母ハツの葬式の際の読経や、昭和五年、次伯母ツネの夫である橋本省三がなくなった時、橋本家の親戚代表として挨拶した。大学付近の根津神社や本郷座の芝居やかつて飯田橋から船に乗って一家で出かけた浅草での芝居見学について記してある。

なむあみだぶつ

宇野家のルーツが三河にあり、浄土真宗大谷派であった宇野家の菩提寺である本郷元町の興安寺のことや、黒田家もまた浄土真宗大谷派であったことが描かれている。

昭和二十年の敗戦間近に亡妻渋谷文子と結婚式をあげたことも記されている。式場は

渡辺善太師の主宰する田園調布にあった日本女子神学校の礼拝堂であり、司式をしたのは由木康牧師¹⁴、オルガンを奏したのは橋本ナホ牧師であった。浄土真宗信者である伯母イネとツネが空襲警報の響き渡るその式場に参席した。聖学院中学校高等学校教職員組合の委員長時代、各地のキリスト教徒の関わり合いは長く広がったが、ついにクリスチャンになることなく、¹⁵死ぬ時には祖母ハツや伯母イネが唱えていた南無阿弥陀仏を唱えて死にたいと思っている。祖母ハツ、伯母イネを通して親鸞上人との出会いがあったからである、と記されている。

② 宇野秀彌『滝野川 幼き日々の記憶より』一九八三年三月刊行（私家版）

伯父橋本省三のこと

宇野秀彌の弟である久彌の養父で、実質的に宇野秀彌の父であった叔父橋本省三のことを中心に、宇野秀彌の小学生時代の話が綴られる。

橋本省三。元治元年（一八六四）～昭和五年（一九三五）。明治三十年代の初めに次伯母ツネと結婚し、英語教師をしていた。新潟市内中学校、東京府立第二中学校（現東京都立立川高等学校）、私立東京高等女学校（現東京学園高校・中学）¹⁶に勤める。私立東京高等女学校時代には宇野家のある本郷森川町から徒歩十分ほどの本郷区丸山新町（現文京区白山一丁目）に居を構える。明治末年か大正の初年には北豊島郡滝野川町観音橋畔（現北区滝野川六丁目）に家を建てて住む。伯母ツネの意向で弟の久彌が養子となる。久彌は後に商人となる。

ねこやま

北豊島郡滝野川町にあった橋本家周辺の様子が描かれる。

橋本家の敷地には二階建て二軒長屋の貸し家があった。下宿人のこと、その界隈で秀彌が体験したことが綴られている。

滝野川万歳館

滝野川町の繁華街にあった映画館である滝野川万歳館について、伯母たちにつれられて通ったことを綴る。後年映画の文章を書き、その文章が三省堂の高等学校用教科書に載ったのは滝野川万歳館のおかげだとしている。

お祭り

滝野川八幡神社と王子神社の祭りについて、橋本家で飼っていた鶏の話。秀彌が小学校五年生の頃に満州事変が起こり、十五年続いた戦争に対する気持ち、その間に江戸、明治、大正の名残が消えてしまったことが書かれている。

③ 宇野秀彌『続本郷森川町 幼き日々の記憶より その3』一九八四年三月刊行（私家

版)

夏羽織

宇野秀彌の母菊栄の記した三つの文が載せられており、菊栄の生い立ちや宇野家に嫁いだ後から関東大震災までの話が描かれ、締め括りは秀彌の文章で補筆されている。

菊栄の祖母の松野ツナ¹⁷の長女の松野チウ二〇歳の時、増田竹次郎と結婚し、明治三一年三月二四日に長女増田菊栄が生まれる。¹⁸得意先の加島屋の隠居がハツのお参り仲間であった縁から菊栄は宇野亥之助に嫁ぐ。大正八年四月三日に見合い、同月二五日に婚礼を挙げる。五月には箱根に新婚旅行に行き、大正九年五月二六日に秀彌誕生。ここでは祖母ツナや母チウのこと、震災の時に森川町と滝野川間を久彌を背負って往復したこと、出産のことなどが、菊栄の言葉で描かれている。

おかちまち

菊栄の父方増田家と、母方松野家の話。以下、宇野英彌による文章。

増田家はもと千住あたりに住む武士であったが明治三〇年頃、神田錦町で運動用具の製造を始め、その後日本橋馬込町に引っ越した。関東大震災の時、大打撃を受け、宇野家を頼って寓居していた。秀彌は母の弟で叔父の増田美正と二ヶ月ほど枕を並べて寝ていた。その後、祖母の増田チウは飯田町で一年ほどミルクホールを営んだ。祖父竹次郎は大正十五年に五七歳で亡くなる。チウの母松野ツナの養子で母菊栄の妹知恵の夫となった松野良三が増田家の運動用具店を継ぎ御徒町に店を構える。増田美正は後に薬剤師になって阿佐ヶ谷に店を構え増田家は独立する。増田家を支えた松野良三は結核をわずらい戦争中に亡くなる。¹⁹

森川町今昔

宇野秀彌の子供の頃の本郷森川町の話。

森川町界隈の店の紹介。一九八三年の夏に西片町教会に招かれて朝鮮の話²⁰をしたことも書かれている。

3000形

東京の市電の話。小学校に入った頃、本郷界隈を走っていた市電三〇〇〇形の話。伯母のイネにつれられて市電に乗って日比谷公園に遊びに行っていた。

④ 宇野秀彌『夏羽織 母菊栄を偲んで』一九八八年六月刊行（私家版）

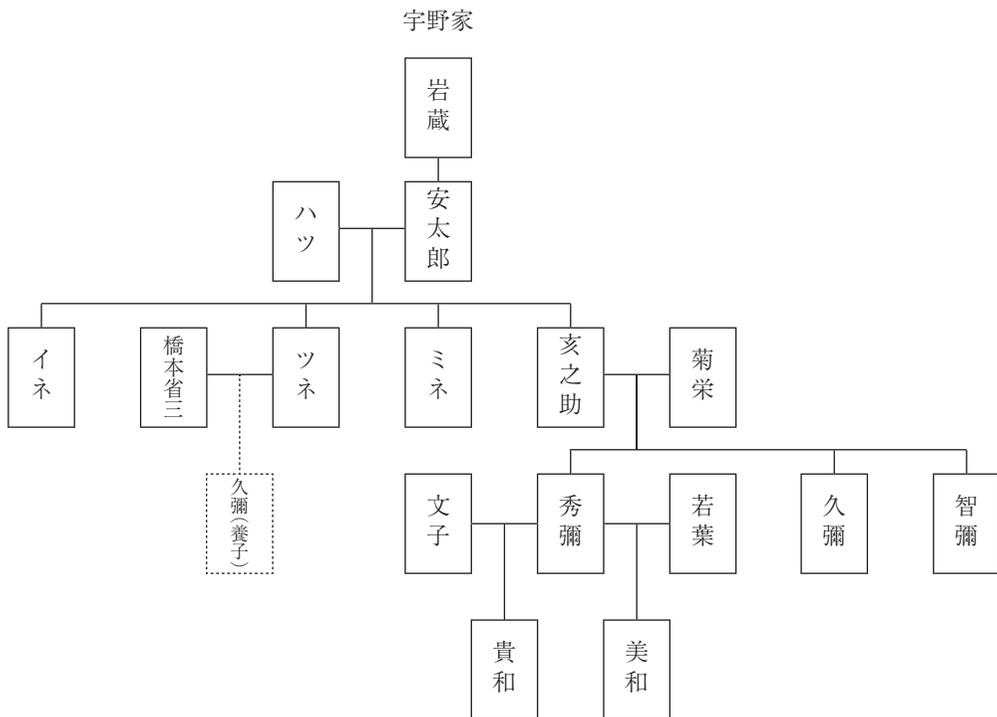
『続本郷森川町幼き日々の記憶より その3』所収の「夏羽織」「おかちまち」の内容が抜粋され、宇野秀彌が母と過ごした思い出が綴られている。追記は以下の通りである。

「夏羽織」での弟久彌の疫病の原因が山形の知り合いの送ってきたサクランボであっ

たこと、パラダイスから父が買ってきたコンビーフの類のぜいたく品が酒代と共に家賃から引かれていたことなどが追記されている。その後は「おかちまち」の内容に、橋本省三の持っていた刀が戦後、占領軍に没収されそうになったが、美術品であることを主張し没収を逃れ、弟の久彌のもとに残っているエピソードが追記されている。その後、母菊栄と暮らしたのは小学校四、五年生頃までであること、宇野家の食卓の様子、母とよく活動写真を見たこと、誠之小学校時代に母が詩を代作してくれたこと、父母の折り合いが悪く、すでに橋本家に世話になっていた秀彌兄弟のもとに母が逗留^{とうりゅう}しに来たこと、秀彌の満州軍隊時代に母が横浜正金銀行（現三菱東京UFJ銀行）に勤めており、住居は浅草から阿佐ヶ谷と引っ越したため空襲に合わずに済み、入隊した弟の面会のため香川県に行ったことなどが書かれている。

3. 宇野家の家系

新資料の内容から宇野家は商家で浄土真宗を信仰し、本郷元町の興安寺を菩提寺としていたことが分かる。新資料や提供いただいた内容をまとめると、宇野家の家系は次のようになる。



岩蔵：曾祖父。三河屋宇野呉服店を繁盛させていた。

安太郎：祖父。明治三十九年没。

ハツ：祖母。嘉永三年生、昭和十三年没。黒田家出身。武家の出身で、家のことは娘のイネにまかせていた。内田家に姪のおテフがいて武家風の物静かな丁寧な物言いの人物だった。

イネ：長伯母。明治八年生。宇野家の食事を整え、秀彌の弁当を作る。白山呉服店の婿を取るが、子を下して別れる。九二歳で亡くなるまで宇野秀彌と暮らす。渡辺裁縫女学校（後の渡辺学園、東京家政大学付属高校・中学）で裁縫を教えたことがある。

ツネ：次伯母。明治十年生。琴を習う、夫は橋本省三。イネとともに明清楽をたしなむ。

ミネ：三伯母。詳細不明。

亥之助：父。明治二十年生。酒と遊び好きで、金銭上のことで母方黒田家の外戚である内田家に不義理をしていた。浄土真宗。

菊栄：母。増田家から宇野家に嫁ぐ。映画が好きだった。

秀彌：聖学院に奉職したが、クリスチャンではなく浄土真宗大谷派。親鸞上人の南無阿彌陀仏を唱えていた。

久彌：次弟。次伯母ツネと橋本省三の養子。橋本省三は秀彌の実質的な父的存在。三井物産に入り極東石油の社長を務める。

智彌：三弟。大正十四年十月二日生。母の菊栄に引き取られる。国鉄に勤め、退職後は税理士を営む。

文子：先妻。旧姓渋谷。昭和二〇年九月十日に秀彌と結婚。昭和二五年二月十一日に肺結核で亡くなる。

貴和：長男。昭和二二年生。日本史を専攻し、家政大附属高校で教鞭をとる。昭和四一年（一九六六）以来実家を離れており、現在群馬県高崎市在住。

若葉：後妻。旧姓福岡。昭和二年神田生。昭和二七年十月三十一日に秀彌と結婚。

今井美和：長女。昭和二九年生。薬学部卒業。二〇一四年二月まで滝野川六丁目のドラッグストアに勤務。現在埼玉県川口市在住。

4. 聖学院中学校高等学校「学校だより」にある宇野秀彌の寄稿記事

聖学院中学校高等学校「学校だより」にある宇野秀彌の寄稿記事については以下のようになる。便宜上、号数日付を先に出し、鍵括弧内は題名、名前以下はそのまま記し、山括弧内に、内容が分かるように、筆者が要旨を示した。

- 1) 第十一号（昭和二七年七月九日）「巻頭言（雑感）」宇野秀彌 <防人の歌と平和について>
- 2) 第一一四号（昭和四六年七月七日）「随想断絶」高等部長 宇野秀弥 <自由民権運動と今の世相>
- 3) 第一二三号（昭和四九年七月一八日）「八月一五日の聖学院」宇野秀弥 <大東亜戦争と敗戦の日>
- 4) 第一三一号（昭和五一年七月二〇日）「伝統とは？」宇野秀弥 <文楽と新劇について>
- 5) 第一三五号（昭和五二年七月二〇日）「勉強する、工夫する」高等部長 宇野秀弥 <日韓表現比較>
- 6) 第一五六号（昭和五七年十一月一日）「あの頃のこと」宇野秀弥 <敗戦前後の聖学院のこと>
- 7) 第一五九号（昭和六一年二月二二日）「退職の弁」宇野秀弥（社会）<在職四三年六カ月での所感>

これらの内容をまとめると以下ようになる。

- 1) の「巻頭言（雑感）」では、以下の言葉を残している。

防人の涙は又幾度となくその流れを新たにした。幾百万の屍を水浸き草むさせた戦争を最後に日本史は終わる。民主日本平和日本の希望を説きながら。罪深き人類は尚もその歴史を血で染め涙でにじませようとしている。平和は神の国を待たなければならぬのであろうか。私は日々日本史を語りながら、万葉集の中に涙の跡を留めた防人たちの苦悩を、今度こそは人の子でありやがては夫たり親たるべきわが愛する生徒たちに味わしめたくないと切に思うのである。

- 2) の「随想断絶」では明治の自由民権運動の弾圧と関連して、戦前の日本が今では思いも及ばないような時代だったこと、そして今の自由で豊かなことが分からない世代に対し、以下の言葉を残している。

古い世代は自信をもって「断絶」と対決し、それをのり越え、若い世代の中に割り込んでいかねばならない、ということこのごろ切に思います。その自信は、古い世代が生きた時代の貧しさと不自由さをしっかりと見つめ、今の世の中で何が本当

の豊かさであり、自由であるかをはっきりと確かめることから生まれるのではないのでしょうか。

- 3) 「八月一五日の聖学院」は、当時の「大東亜戦争」敗戦の日を描いていた内容となっている。武道場が軍需用乾電池工場となり、教師も生徒もカーボンで体中真黒にしながら、木槌の音騒々しく、乾電池の外函にカーボンを叩き込む作業に追われていた。食料も極度に乏しく、母親の苦心と愛情の結晶である生徒の弁当を、校舎を兵舎にしている帝国陸軍の兵士が盗みに来る、という憤懣遣る方ない事件も起こっていたことが記されている。
- 4) 「伝統とは？」では、創立七〇周年を迎える聖学院の「伝統」を考える上で、新劇と文楽を対比させ、以下のことがまとめられている。

古い昔のことを回顧的、情緒的に言い継ぎ語り伝えても「伝統」を誇ることにはならない。「今」と「これから」に向って、問いかけ、働きかける力が泉のように常に湧き上がってくるのが「伝統」だと思う。その力は七十年の長い歴史があつてこそ、しほり出されてくる。それをしほり出す責任は、今、聖学院で働き、学ぶ私たちの責務だと考える。太棹の三味の音に舞い踊る文楽の人形から感動を受ける度に、厳しく鞭打たれる思いを新たにす。

- 5) 「勉強する、工夫する」では、日本語と韓国語の語感の違いが述べられている。日本語の「相談する」に対する韓国語の「議論する」を取り上げ、「論議は相談より騒がしい」、「自己主張が強いようである」とし、「その底に、日本人と韓国人の意識の差異が読み取られて興味深い」とし、日本語の「議論」に当たる韓国語の「論争」も挙げている。また日本語の「勉強する」は、「絶えず勉め励む、意である」とし、商人の「勉強する」から「自己犠牲なり、献身が伴うようである」としている。一方で韓国語の「勉強」に当たる「工夫」は「知恵をしほったり、思案にふけったりする姿が想像される」として、その考察が鋭い。
- 6) 「あの頃のこと」では、自らの生い立ちから戦中、戦後の聖学院の様子がつぶさに描かれている。

宇野家は、大坂石山本願寺の顕如上人の右筆で『宇野主水日記』を遺した宇野主水の流れをくみ、代々浄土真言宗大谷派の門徒であったとしている。²¹ 幼少時、滝野川

町に暮らしたこと、その近くにある聖学院に就職したこと、昭和十七年当時は聖学院では飛鳥山で運動会をしていたこと、また軍事教練の盛んなことに驚き、教練の教師が生徒を足蹴りにするのを見て仰天したこと、また礼拝も聖書の授業もなかったが、ユニークな教師も多く、何人かの教師とは特高警察の耳に入ったら大変なことも話せ、大学生活にはなかった信頼関係が築け、軍国主義学校聖学院の中にキリスト教が息づいていたことが書かれている。

戦争との関連としては、教壇に立つこと一年、召集令状を渡され、九〇式短小銃を背負って北満に渡り重傷を負い帰国。敗戦の色濃い戦時中、生徒諸君からの軍事郵便に感動を受け、再び教壇に戻ったが、校舎の大部分は「帝都防衛部隊」が駐屯し、生徒の弁当が帝国陸軍の兵士に盗まれるという憤懣遣る方ない事件が起こる。三月九日夜の空襲により、翌日は学校に罹災者があふれ、工場も焼失。乾電池工場となった学校で「玉音放送」を聞く。戦後はアメリカ人教員も加わり、教育の現場に、ホームルーム、カリキュラム、ガイダンス、カウンセリング、PTA等のアメリカ語が持ち込まれた。最後の締めくくりとして、次の言葉を残している。

あの飢えていた時代、今思い出してもぞっとする時代、しかし、その飢えが緊張と活力をもたらし、進歩、向上に人を駆り立てていった。今、日本は物質的には豊かな国になった。生徒諸君が食物や紙を粗末にするのを見ると心が痛む。落とし物保管箱に時計がいっぱい詰まっているが引き取る者がいない。だが、あの頃とは質は違うであろうが、もっと恐ろしい飢餓が見かけの豊かさの中に迫って来ているのではなかろうか。その飢餓を感じ取ることのできる者こそ、自分に緊張と活力をもたらして、進歩・向上の道をたどることができる者となり得るのではなかろうか。

- 7) 「退職の弁」は在職四十三年六ヶ月を終えての所感である。教科担任として二万回以上教壇に立ったこと、教師という職業にベテランという概念がないこと、自らが学んだ中学・高校が官立でありながら自由な学風であったため、聖学院の学風にも肌に合ったことなどが書かれている。

以上が「学校だより」の内容のまとめであるが、その中で最も多くかつ注目されるのが「大東亜戦争」に関連する記憶である。敗戦前後の最も苦しい時期を聖学院で過ごした宇野秀彌にとって、それは忘れることのできない追憶であり、多くの犠牲と共に、必死で生きてきた姿を物語るものである。また韓国語と関連する内容である「勉強する、工夫する」があるが、相談するという言葉から日韓の比較が始まり、その内容は韓国人の文化や

特徴までよく表しているといえよう。「勉強する、工夫する」が寄稿された一九七七年は、『洪吉童伝』つまり古典作品がはじめて訳された年でもあり、宇野秀彌の韓国語への理解の深さが感じられる内容だといえよう。

5. おわりに

本稿は宇野秀彌の幼き日々の追憶や家族のことを記した新資料四点を紹介し、また聖学院の「学校だより」に掲載された宇野秀彌の記事も併せて紹介した。これらの新資料に接するまでは、なぜ宇野秀彌という高校の一歴史教員がおびただしい量の『朝鮮文学試訳』を翻訳するに至ったのか謎であった。しかし今回紹介した新資料四点や「学校だより」などから、宇野秀彌の幼少時に過ごした本郷森川町や北区滝野川界限が、家族史も交えた形で、その追憶の地となっていることが分かった。昭和三年の金融恐慌が原因となって一家離散となった後、滝野川の橋本家に引き取られた弟の久彌と生活を共にしており、その滝野川が縁となり聖学院に就職、さらに聖学院での教え子との出会いが、宇野秀彌を朝鮮語学習、そして朝鮮文学の翻訳へと導いていったことが分かった。すなわち宇野秀彌は、幼いころ聖学院の発祥地である滝野川で過ごしたことから聖学院の教師となった。戦争で九死に一生を得た折も、聖学院での生徒諸君からよせられた軍事郵便に感動し聖学院に復帰した。そして、聖学院で迎えた終戦の記憶、教え子であり元同僚であった桑ヶ谷森男氏の朝鮮への関心、在職中に教えた数人の韓国人生徒との交流など、つまるところ宇野秀彌の『朝鮮文学試訳』は聖学院での教え子との縁によって生まれたものだといえよう。そして新資料にみられる幼き日々の追憶は後の聖学院就職への伏線だったということが分かるのである。²²

『朝鮮文学試訳』は梶井陟によって、「原典に忠実な点、丁寧な註と解説がつけられている点で高く評価された。そして朴泰圭の「公刊されなかったのは大変に残念なことである」とあるように、宇野秀彌の翻訳は、今後何らかの形で多くの人に読まれるべきだと考える。今後、宇野秀彌の翻訳に対し、より多くの人々の関心が寄せられることを願う次第である。

最後に宇野秀彌と関連する全ての資料をもとに年表を作成した。²³ また年表作成のために、宇野秀彌による出版資料の他、鄭雅英氏からの情報²⁴、平方邦行氏より『聖学院中学校高等学校百年史』²⁵の提供、教え子かつ元同僚の桑ヶ谷森男氏の証言、教員の真田幸男氏の資料、御長男宇野貴和氏からの便りなど、多くの方のご協力をいただいた。特に御長女の今井美和氏からは写真をはじめ多くの資料を提供いただき、桑ヶ谷森男氏、真田幸男氏の提供の写真とともに関連写真として付す。²⁶ ここにおいて皆様に深謝の意を表する次第である。

大正九年 (一九二〇)	誕生	宇野秀彌が五月二六日に生まれる。本籍は東京市本郷区森川町(現、文京区本郷六丁目)。父親は三河屋宇野呉服店宇野安太郎の長男、亥之助(明治二十年生)。母親は日本橋馬込町で運動用具の製造業をしていた増田竹次郎の長女、増田菊栄(明治三一年五月二四日生)。弟に久彌(大正十一年十月二二日生、父方の次伯母ツネと橋本省三の養子)、智彌(大正十四年十月二一日生)がいた。幼少期、祖母や伯母に連れられて、本郷森川町にあった仏教教会の求道学舎に足繁く通った。また近隣の興安寺などにも通った。(「あの頃のこと」聖学院中学校高等学校「学校だより」第一五六号、昭和五七年十一月一日)
大正十二年 (一九二三)	三歳	関東大震災で森川町の宇野呉服店は破壊し、東京都北区滝野川に避難。
昭和元年 (一九二六)	六歳	母方の祖父、増田竹次郎が五七歳で亡くなる。 この頃、久彌が疫痢にかかり大学病院に入院。亥之助が二〇〇円の借金をする。 小学校入学前、森川町の家を人に貸して、滝野川町字西ヶ原(北区西ヶ原三丁目)小峯病院の近くに移るが半年ほどで舞い戻る。(『本郷森川町』九頁)
昭和二年 (一九二七)	六歳	四月、文京区 <small>せいし</small> の誠之小学校入学
昭和三年 (一九二八)	八歳	金融恐慌によって宇野呉服店が破綻し、土地や家財を差し押さえられ売却される。
昭和五年 (一九三〇)	九歳	北区滝野川6丁目にいた父親代わりの橋本省三が亡くなる。
昭和六年 (一九三一)	十一歳	久彌が橋本省三の養子となる。 この頃、母と離れて久彌とともに橋本家で暮らす。満州事変勃発。
昭和八年 (一九三三)	十二歳	旧制東京高等学校(七年制)に入学。
昭和十三年 (一九三八)	十八歳	祖母の宇野ハツがなくなる。享年八八歳。

昭和十五年 (一九四〇)	十九歳	東京帝国大学文学部国史学科（三年制）に入学。学生時代には弓道をした。 日本史専攻で、指導教官である平泉澄教授のもとで日本中世史を学ぶ。当時「皇国史観」で息が詰まりそうだった国史科よりは自由な学風が残っていた神道学科に親しみを持っており、印度哲学科の花山信勝教授に真宗教学を学び、法学部の小野清一郎教授の歎異鈔講義に参席した。（「あの頃のこと」）
昭和十七年 (一九四二)	二二歳	三月、東京帝国大学文学部国史学科を卒業。卒業論文は江戸時代の大衆芸能。 十月、聖学院中学校高等学校に着任、歴史担当の教員になる。 滝野川に長らく住み、聖学院のことをよく知っていたため、就職を喜んで引き受けたとある。（「あの頃のこと」）滝野川には聖学院の学院教会である滝野川教会があり、明治三七年（一九〇七）九月に誕生、最初の礼拝は米国基督教会ディサイプルス派の宣教師 HH ガイ博士によって執り行われたとされる。聖学院は、明治三六年（一九〇三）に「聖学院神学校」として設立された学校で、明治三八年（一九〇五）には女子聖学院も設立された。
昭和十八年 (一九四三)	二三歳	陸軍に入隊、満州に派兵される。足に銃弾を受け戦線離脱。九死に一生を得る。
昭和十九年 (一九四四)	二四歳	この頃、生徒諸君からよせられた軍事郵便に感動し、聖学院に復帰を決める。
昭和二十年 (一九四五)	二五歳	三月九日、夜に空襲に見舞われ、十日に下落合の自宅から出勤。聖学院には罹災者 ^{りさいしゃ} であふれる。 敗戦直前頃、聖学院中学校高等学校の職員であった渋谷文子と結婚。田園調布にあった渡辺善太主宰の日本女子神学校礼拝堂にて、由木康牧師の司式、後に聖学院の英語教員となる橋本ナホ氏のオルガン演奏で祝福される。 八月十五日、乾電池工場となった聖学院で敗戦を迎える。
昭和二十一年 (一九四六)	二六歳	後の妻となる福岡若葉が聖学院中学校高等学校の図書職員として着任。
昭和二十二年 (一九四七)	二七歳	長男貴和誕生。

昭和二五年 (一九五〇)	三〇歳	二月十一日、妻の文子が肺結核で亡くなる。 この頃、聖学院中学校の三年生であった桑ヶ谷森男に日本史を教える。
昭和二六年 (一九五一)	三一歳	三省堂の高校国語教科書に「映画を味わうために - トーキーの表現」を執筆。(三省堂編修所『高等国語 二下』三省堂、五七～六九頁)
昭和二七年 (一九五二)	三二歳	七月九日、聖学院中学校高等学校「学校だより」第十一号「巻頭言(雑感)」に、防人の苦悩の歌を紹介するとともに、生徒に二度と戦争の苦難を味わわせたくない旨を記す。 十月三十一日、同年八月に退職した福岡若葉と再婚。 東京都小平学園に居を構える。
昭和二九年 (一九五四)	三四歳	長女美和誕生。
昭和三〇年 (一九五五)	三六歳	十月、昨年三月十一日に焼失した聖学院の旧講堂に代わって新講堂が落成し、同年十二月から学校企画による「映画教室」が開催、一九七〇年頃まで百数十回続けられ、宇野秀彌も担当教員として活躍する。(「映画教室」『聖学院中学校高等学校百年史』聖学院中学校高等学校、二〇〇七、二八一～二八二頁)
昭和三三年 (一九五八)	三八歳	この頃、埼玉県大宮市桜木団地へ転居。
昭和三四年 (一九五九)	三九歳	四月、教え子の桑ヶ谷森男が聖学院高等学校の社会担当の教員となり、東洋史を教える。
昭和三七年 (一九六二)	四二歳	東京都北区赤羽台団地に転居。
昭和三九年 (一九六四)	四四歳	この頃、日本朝鮮研究所の所員でもあった桑ヶ谷森男の「現場教師のつかんできた民族教育メモ」(『朝鮮研究』九・十月号、日本朝鮮研究所、一九六四年、十六～十八頁)を受け取る。
昭和四一年 (一九六六)	四六歳	この頃、桑ヶ谷森男の一部翻訳作業、日本朝鮮研究所翻訳編集・朝鮮文化史刊行会『朝鮮文化史』(亜東社、一九六六)を知る。
昭和四二年 (一九六七)	四七歳	聖学院高等学校の評価委員会の委員に選ばれる。 (『聖学院中学校高等学校百年史』聖学院中学校高等学校、二〇〇七、三三五頁)

昭和四六年 (一九七一)	五一歳	この頃、聖学院高等学校の教頭となり九年間務める。 韓国語に興味を持ち始めるか。 七月七日、聖学院中学校高等学校「学校だより」第一一四号「随想断絶」寄稿。
昭和四七年 (一九七二)	五二歳	七月二二日、野尻湖で聖学院中学校二年の松本太和の水死事故が起こる。(『聖学院中学校高等学校百年史』聖学院中学校高等学校、二〇〇七、三五五～三六一頁) この頃、韓国語の勉強を始める。(五二歳)
昭和四六年 (一九七三)	五三歳	埼玉県川口市飯塚三・三・七・七〇五に転居。 この頃、韓国入子弟との交流があり、朝鮮文学に興味をおぼえはじめたか。
昭和四九年 (一九七四)	五四歳	この頃、韓国短編小説紹介を行なう。 韓国短編小説紹介1に徐基源『馬鹿列伝』と崔海君『波紋』を訳す。 韓国短編小説紹介2にパク・シジョン『パン・チョッパリ - 原題陶工の娘 - 』と鮮于輝『馬徳昌大人』を訳す。 七月十八日、聖学院中学校高等学校「学校だより」第一二三号「八月一五日の聖学院」寄稿。 八月、韓国短編小説紹介3に鮮于輝『先塋』『上院寺』を訳す。 十二月、韓国短編小説紹介4に金東仁『明文』『さつまいも』『狂画師』『赤い山』を訳す。
昭和五〇年 (一九七五)	五五歳	四月、韓国短編小説紹介5に金東里『等身仏』『巫女図』を訳す。 八月、韓国短編小説紹介6に李光洙『許生伝』1を訳し、朝鮮文学試訳6と改題する。 同月、朝鮮文学試訳7に李光洙『許生伝』2を訳す。 十二月、朝鮮文学試訳8、9に李光洙『許生伝』3、4を訳す。 この頃、訳文を学内で印刷し、同僚に配布。
昭和五一年 (一九七六)	五六歳	四月、朝鮮文学試訳10、11歴史小説1、2に朴鐘和『民族』を訳す。 七月二〇日、聖学院中学校高等学校「学校だより」第一三一号「伝統とは？」寄稿。 八月、朝鮮文学試訳12歴史小説3に朴鐘和『民族』を訳す。 十二月、朝鮮文学試訳13歴史小説4に朴鐘和『桂月香』『首くくりし女人』『アランの貞操』を訳す。

<p>昭和五二年 (一九七七)</p>	<p>五七歳</p>	<p>同月、朝鮮文学試訳 1 4 歴史小説 5 に洪暁民『仁祖反正』を訳す。 七月二〇日、聖学院中学校高等学校「学校だより」第一三五号「勉強する、工夫する」寄稿。 八月、朝鮮文学試訳 1 5 歴史小説 6 に朴容九『太平聖世』を訳す。 十一月、朝鮮文学試訳 1 6 古典 1 に『洪吉童伝』を訳す。</p>
<p>昭和五三年 (一九七八)</p>	<p>五八歳</p>	<p>三月、桑ヶ谷森男が聖学院を退職し、四月に国際基督教大学高等学校の教頭として赴任する。 三月、朝鮮文学試訳 1 7 古典 2 に『沈清伝』を訳す。 八月、朝鮮文学試訳 1 8 古典 3 に『烈女春香守節歌・京板春香伝』を訳す。 十二月、朝鮮文学試訳 1 9 古典 4 に『於于野談』を訳す。</p>
<p>昭和五四年 (一九七九)</p>	<p>五九歳</p>	<p>二月、朝鮮文学試訳 2 0 古典 5 に『要路院夜話記』を訳す。 四月、朝鮮文学試訳 2 1 古典 6 に『雲英伝』を訳す。 八月、朝鮮文学試訳 2 2 古典 7 に『壬辰録・日東壯遊歌』を訳し、印刷のための文部省科学研究費補助金を受ける。 十二月、朝鮮文学試訳 2 3 古典 8 に『九雲夢』を訳す。</p>
<p>昭和五五年 (一九八〇)</p>	<p>六〇歳</p>	<p>八月、朝鮮文学試訳 2 4 新小説 1 に李人植『血の涙・牡丹峰』を訳す。 九月、朝鮮文学試訳 2 5 新小説 2 に李人植『鬼の声』を訳す。 九月、朝鮮文学試訳 2 6 新小説 3 に李人植『銀世界』を訳す。 同月、朝鮮文学試訳 2 7 新小説 4 に李人植『雉岳山』を訳す。 十二月、朝鮮文学試訳 2 8 古典 9 に『龍飛御天歌』を訳す。</p>
<p>昭和五六年 (一九八一)</p>	<p>六一歳</p>	<p>二月、朝鮮文学試訳 2 9 古典 1 0 に『仁顕王后伝』を訳す。 四月、朝鮮文学試訳 3 0 古典 1 1 に『謝氏南征記』を訳す。 五月、朝鮮文学試訳 3 1 古典 1 2 に『淑英娘子伝』を訳す。 八月、朝鮮文学試訳 3 2 新小説 5 に崔瓊植『秋月色』を訳す。 同月、朝鮮文学試訳 3 3 新小説 6 に具然学 翻案『政治小説 雪中梅』を訳す。 十一月、朝鮮文学試訳 3 4 新小説 7 に李海朝『鬢上雪』を訳す。</p>

<p>昭和五七年 (一九八二)</p>	<p>六二歳</p>	<p>一月、朝鮮文学試訳35新小説8に李海朝『自由鍾』を訳す。 三月、朝鮮文学試訳36新小説9に李海朝『牡丹屏』を訳す。 同月、『本郷森川町 幼き日々の記憶より』刊行。 五月、朝鮮文学試訳37新小説10に陸定洙『松籟琴』を訳す。 七月、朝鮮文学試訳38新小説11に安国善・金ピルス『禽獸会議録・警世鐘』を訳す。 十月、朝鮮文学試訳39古典13に『癸丑日記』を訳す。 十一月一日、聖学院中学校高等学校「学校だより」第一五六号「あの頃のこと」寄稿。</p>
<p>昭和五八年 (一九八三)</p>	<p>六三歳</p>	<p>三月、『滝野川 幼き日々の記憶より』刊行。 四月、聖学院中学校高等学校の教員となった鄭雅英（平成五年退職）と同僚になる。 同月、朝鮮文学試訳40古典14に『閑中録』上を訳す。 同月、朝鮮文学試訳41古典15に『閑中録』下を訳す。 七月、朝鮮文学試訳42古典16に『淑香伝』を訳す。 八月、朝鮮文学試訳43古典17に『金鰲新話』を訳す。 夏頃、西片町教会に招かれて朝鮮の話をする。 九月、朝鮮文学試訳44古典18に『彩鳳感別曲』を訳す。 十一月、朝鮮文学試訳45古典19に『玉丹春伝・烏有蘭伝』を訳す。</p>
<p>昭和五九年 (一九八四)</p>	<p>六四歳</p>	<p>一月、大韓民国政府文教部『高等学校国史』（近・現代）を翻訳刊行。 三月、朝鮮文学試訳46古典20に『裴裨將軍・雍固執伝』を訳す。 同月、朝鮮文学試訳47古典21に『辛未録』を訳す。 同月、『続本郷森川町 幼き日々の記憶より その3』刊行。 六月、朝鮮文学試訳48古典22に『林慶業伝・朴氏夫人伝』を訳す。 九月、朝鮮文学試訳49古典23に『三説記』を訳す。 十一月、大韓民国政府文教部の『高等学校国史』（原始・古代～近世）を鄭雅英と共訳刊行。</p>

<p>昭和六〇年 (一九八五)</p>	<p>六五歳</p>	<p>四月、朝鮮文学試訳50古典24に『李朝漢文小説選上』を訳す。 四月、朝鮮文学試訳51古典25に『李朝漢文小説選下』を訳す。 七月、朝鮮文学試訳52古典26に『三仙記・李春風伝』を訳す。 八月、朝鮮文学試訳53古典27に『麗朝漢文小説選』を訳す。 十一月、朝鮮文学試訳54古典28に『雄雉伝・蟾同知伝』を訳す。</p>
<p>昭和六一年 (一九八六)</p>	<p>六六歳</p>	<p>二月二二日、聖学院中学校高等学校「学校だより」第一五九号「退職の弁」寄稿。 三月、聖学院中学校高等学校を定年退職する。 「<雄雉伝> - 朝鮮古典文学翻訳の試み」(聖学院中学校高等学校編『聖学院中学校高等学校百年史』聖学院中学校高等学校、三一五～三三二頁)を聖学院中学校高等学校編『研究紀要』第五号に載せる。 三月、朝鮮文学試訳57古典29に『北学議』を訳す。 五月、朝鮮文学試訳56古典30に『丙子録』を訳す。 七月、朝鮮文学試訳57古典31に『角干先生実記・金庾信將軍伝記』を訳す。 十月、朝鮮文学試訳58古典32に『内房歌辞』を訳す。</p>
<p>昭和六二年 (一九八七)</p>	<p>六七歳</p>	<p>一月、朝鮮文学試訳59古典33に『松江歌辞・蘆溪歌辞』を訳す。 六月、朝鮮文学試訳60古典34に『時調 1 青丘永言・海東歌謡・歌曲源流より』を訳す。 同月、朝鮮文学試訳61古典35に『時調 2 青丘永言・海東歌謡・歌曲源流より』を訳す。 十一月、朝鮮文学試訳62古典36に『時調 3』を訳す。 同月、朝鮮文学試訳63古典37に『時調 4』を訳す。</p>
<p>昭和六三年 (一九八八)</p>	<p>六八歳</p>	<p>三月、朝鮮文学試訳64古典38に『李朝伝奇小説選』を訳す。 四月、朝鮮文学試訳65古典39に『彰善感義録』を訳す。 同月、朝鮮文学試訳66古典40に『劉忠烈伝・洪桂月伝』を訳す。 六月、『夏羽織 母菊栄を偲んで』刊行。 八月、朝鮮文学試訳67古典41に『濟州島の昔話』を訳す。 十月、朝鮮文学試訳68古典42に『鬱陵島の伝説・民謡』を訳す。 十二月、朝鮮文学試訳69古典43に『民話選』を訳す。</p>

平成元年 (一九八九)	六九歳	十月、朝鮮文学試訳70古典44に『民俗劇』を訳す。
平成二年 (一九九〇)	六九歳	一月、亡くなる。享年六九歳。

宇野秀彌 関連写真 (今井美和氏提供)



弓道場 学生時代



陸軍病院にて (右端が宇野秀彌) 戦時中



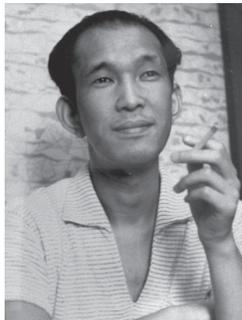
宇野貴和氏・宇野若葉氏・今井美和氏



宇野秀彌夫妻



電車 青年時代



煙草と宇野秀彌



奉職時代の宇野秀彌



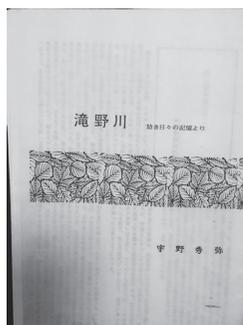
宇野秀彌



退職後の宇野秀彌
一九八六年十一月三十日撮影



『本郷森川町』
(一九八二年三月)



『滝野川 幼き日々の
記憶より』
(一九八三年三月)



『続・本郷森川町幼き日々の記憶より その3』
(一九八四年三月)
裏表紙には昭和十年頃の本郷区の町割り
図が掲載



『夏羽織 母菊栄を偲んで』
(一九八八年六月)

宇野秀彌 関連写真 (真田幸男氏提供)



宇野秀彌「巻頭言 (雑感)」
〔「学校だより」第十一号〕



聖学院中学校高等学校に所蔵された
宇野秀彌の訳書

宇野秀彌 関連写真（桑ヶ谷森男氏提供）



宇野秀彌（四十歳頃）と
桑ヶ谷森男（二五歳頃）



組合役員メンバーの四人。
左から桑ヶ谷、宇野秀彌（四十歳前半頃）
野辺地（国語）、大島（英語）
宇野秀彌は委員長、教員と学校の双方に人望があり、一九七一年に教頭となる。
野辺地は「女学雑誌」の研究者、慶応通信で「女学雑誌諸索引」を著す。



社会科の同僚 右から桑ヶ谷森男、
宇野秀彌（四十代半ば頃）

1. 現東京都北区中里に所在する。
2. 宇野秀彌^{うのひでや}は『朝鮮文学試訳』全七〇巻の他にも、一九八四年一月に『韓国国定教科書高等学校国史 近・現代（大韓民国文教部一九八二）』を翻訳、同年十月に『韓国国定教科書高等学校国史 原始・古代～近世（大韓民国文教部一九八二）』を鄭雅英と共に翻訳した人物として知られ、これらも現在、国立国会図書館に収められている。国立国会図書館以外では、東京都立図書館に『朝鮮文学試訳』の一部を所蔵している。東京都立図書館検索では十八～二三巻（古典3～8）は都立多摩図書所蔵、二四～二七、三二～三八巻（新小説1～11）、四四～七〇巻（古典18～44）は都立中央図書館所蔵で、四七巻（古典21）が欠巻とされる。筆者が二〇一二年に都立中央図書館で閲覧した際には、一九～二三巻も都立中央図書館で所蔵されていた。概ね都立本は一八巻（古典3）をはじめ乱丁が見られる。また『朝鮮文学試訳』の一部は文部省科学研究費の補助金を受けて刊行されている。二二巻（古典7）『壬辰録・日東壯遊歌』と二三巻（古典8）『九雲夢』のはしがきの末尾に、「この冊子は文部省科学研究費補助金によって印刷しました」「この翻訳研究と印刷は文部省科学研究費補助金によります」と記してある。公刊されず、国立国会図書館などに所蔵されているのは、宇野秀彌の意志をはじめ、経済的な理由や補助金の経由とも関連すると考えられる。
3. 梶井陟「朝鮮文学翻訳の足跡（二）続・古典の翻訳刊行」『季刊三千里』二三号（一九八〇年秋）
4. 「宇野秀彌訳の京版本『春香伝』について」六三回朝鮮学会大会、二〇一二年十月七日。「宇野秀彌の生い立ち年表と関連資料について」六五回朝鮮学会大会、二〇一四年十月五日。本稿は六五回朝鮮学会大会での発表を基にして更に補筆、修正を加えたものである。なお、秀彌の名前は「彌」が正式であるが、印刷物など、時として新旧の両字体が混じっていることを記しておく。
5. 『朝鮮文学試訳』16（古典1）『洪吉童伝』の裏表紙に「川口市飯塚三-三-七-七〇五」とある。
6. なお一卷から十五巻の短編小説の翻訳は公共図書館には収められていないが、聖学院中学校高等学校には残されている。写真参照。したがって、一卷から十五巻の翻訳作品は朴泰圭や田尻浩幸など、一部の研究者が宇野若葉夫人を通じて個人的に入手していたといえよう。注の8参照。
7. 宇野秀彌『本郷森川町 幼き日々の記憶より』今井美和氏提供・山田恭子所蔵、一九八二年三月。宇野秀彌『滝野川 幼き日々の記憶より』今井美和氏提供・山田恭子所蔵、一九八三年三月。宇野秀彌『続本郷森川町 幼き日々の記憶より その3』今

井美和氏提供・山田恭子所蔵、一九八四年三月。宇野秀彌『夏羽織 母菊栄を偲んで』
今井美和氏提供・山田恭子所蔵、一九八八年六月。

8. 今井美和氏提供資料。朴泰圭「日本新歌舞伎と韓国唱劇に関する比較研究 - 坪内逍遙『桐一葉』と李人植『銀世界』の近代性及び近代演劇史における役割を中心に」大阪外国語大学博士論文シリーズ、大阪外国語大学言語社会学会、一九九二年一二月。この論文の前書きの「謝辞」には「李人植に関する詳しい情報を教えてくださった天安大学の田尻浩幸先生、様々な文献を送ってくださった宇野若葉氏、今村伊太郎氏、田中実氏に感謝いたします」など記されている。今井氏の提供資料には、一九九二年五月二八日と二〇〇〇年九月九日付けで宇野若葉夫人宛に送られた田尻浩幸氏の学位論文もあった。田尻浩幸「菊初李人植論 - 李人植의 생애와 <血의 涙>、<銀世界>에 나타난 사회진화론의 수용 및 立憲 改革思想을 中心으로 -」延世大学校大学院国語国文学科碩士学位論文、一九九一年十二月。田尻浩幸「李人植研究」高麗大学校大学院国語国文学科博士學位論文、二〇〇〇年六月。このうち碩士論文には田尻氏が平成四年五月二七日付で宇野若葉夫人に宛てた便箋が挟んであり、一九九二年に宇野秀彌『朝鮮文学試訳』の新小説部分の送付を頼んでいたことが記されている。
9. 注8の朴泰圭の博士論文の参考文献の後にある「宇野秀彌氏の朝鮮文学試訳について」には、宇野秀彌が韓国作品の翻訳に専念するようになった事情が書かれ、宇野秀彌訳『銀世界』を参考にしたと記されている。その内容は以下の通りである。「日本で初めて李人植の『銀世界』を翻訳したのは宇野秀彌氏（一九二〇年 - 一九九〇年）である。東京大学卒業後（一九四三年、日本史専攻）、四三年間聖学院高等学校の教師を務めた宇野氏は、一九七二年（五二歳）から韓国語の勉強を始め、二年後である一九七四年から試訳として韓国短編小説を紹介し始めた。宇野若葉夫人によると宇野氏は在職中に教えた数人の韓国人子弟との交流があり、朝鮮文学に興味をおぼえ、韓国の小説の中に日本・日本人との関わりあいをどのように取り上げて描いているかに深い関心を持つようになったが、それをきっかけに韓国作品の翻訳に専念するようになったという（注2、宇野若葉氏からの手紙による）。試訳とはいえ、宇野氏の翻訳は素晴らしい業績として評価すべきだと思う。本稿で分析を行った『銀世界』は一九〇八年に出版された作品で、殆ど九〇年前の韓国語で創作されている。しかも作者李人植は、韓国の諺や東洋の歴史的人物を豊富に使い、リズム感のある擬声語と副詞をもって作品の文化的効果を高めている。そのため『銀世界』の翻訳は決して容易ではないが、宇野氏は、『銀世界』の文学的な表現を十分に活かし、生き生きとした原文の雰囲気を書實的な日本語でそのまま写している。日本における『銀世界』の最初の、また唯一の翻訳が私家版として刊行され、公刊されなかったのは大変に残念な

ことであるが（注3、実は宇野氏の生前中に知人から何度か刊行の話があったが、自分ではそんなに価値を認めなかったし、晴れがましい事を好まない性格であった為出版を断ったと言う－宇野若葉氏からの手紙による）、宇野氏の七〇冊にも及ぶ翻訳書は、日本は勿論のこと、韓国においても韓国文学研究に非常に役立つ、貴重な資料であると思う。本稿は韓国の演劇や李人植に関する理解を広げる為、『銀世界』の翻訳を付録に付けることにした。しかし語彙力や個人能力の限界で、『銀世界』の翻訳は、作品の内容を伝えることに目的を置き、文学作品としての鑑賞は宇野氏の翻訳を参考にすることを勧めたいと思う。なお、本稿における『銀世界』の翻訳は、宇野秀彌訳『銀世界』を参考にしていることを明らかにしておきたいと思う。」上掲論文、「宇野秀彌氏の朝鮮文学試訳について」参照。原文にあるアラビア数字は漢数字に筆者が変更した。なお、宇野秀彌の教え子で元同僚であった桑ヶ谷森男氏の手紙によると、聖学院中学校高等学校には少なからぬ韓国人子弟がおり、当時の宇野秀彌も親しくしていた教え子がいたとされる。

10. 一九三五年二月東京都に生まれる。戦時中に学童集団疎開を体験。聖学院中学校で宇野秀彌から日本史を教わった。一九五七年に国際基督教大学の一期生として卒業。浦和高等学校と母校である聖学院中学校高等学校の教職を経た後、一九七八年 I C U 高校創立時から十四年間教頭、一九九二年から二〇〇二年まで校長を歴任。歴史教育、帰国子女教育に取り組む。「海峡」同人。高麗博物館会員。日中友好協会会員。桑ヶ谷森男「現場教師のつかんできた民族教育メモ」『朝鮮研究』九・十月号、日本朝鮮研究所、一九六四年。朴世永著・桑ヶ谷森男訳『星の国—植民地下・朝鮮児童文学作品集』同時代社、二〇一三年。桑ヶ谷森男「『星の国』に掲載された鹿地亘の童話および編集者たちの活動」『海峡』二九、社会評論社、二〇一八。桑ヶ谷森男氏は聖学院中学校高等学校在職中である昭和三六年（一九六一）に竹内好「方法としてのアジア」の講演を聴き朝鮮語に目覚め、朝鮮関係の文献を自ら訳して当時の同僚である宇野秀彌に配布していた。ここで竹内好は「制度上および意識上、アジア研究がおろそかにされている」とし、当時、天理大学をのぞいて日本において朝鮮語をやる大学がない現状を示し、学問研究の体制を変えていかねばならないことを指摘、「日本からいって一番近い外国である朝鮮のことを、われわれは実に知らない。知らないばかりでなくて、知ろうとしない。大学で朝鮮語をやるところがないというのは、そのあらわれです。実に不思議な現象だと思えます。」と語っている。武田清子編『思想史の方法と対象』創文社、一九六一年、二二六頁参照。
11. 真田幸男氏は一九五九年四月から二〇〇四年三月まで聖学院中学校高等学校の保健体育の教員として勤務され、その後、同校の百年史編纂を担当された。

12. 宇野秀彌「巻頭言（雑感）」聖学院中学校高等学校「学校だより」第十一号、一九五二年七月九日。宇野秀彌「随想断絶」聖学院中学校高等学校「学校だより」第一一四号、一九七一年七月七日。宇野秀彌「八月一五日の聖学院」聖学院中学校高等学校「学校だより」第一二三号、一九七四年七月十八日。宇野秀彌「伝統とは？」聖学院中学校高等学校「学校だより」第一三一号、一九七六年七月二〇日。宇野秀彌「勉強する、工夫する」聖学院中学校高等学校「学校だより」第一三五号、一九七七年七月二〇日。宇野秀彌「あの頃のこと」聖学院中学校高等学校「学校だより」第一五六号、一九八二年十一月一日。宇野秀彌「退職の弁」聖学院中学校高等学校「学校だより」第一五九号、一九八六年二月二二日。
13. 明清楽みんしんがくとは、江戸時代に中国から日本へ伝来した音楽で、明王朝の廟堂音楽であった明楽と、清朝時代の民間の軽音楽であった清楽との総称である。詳細は以下の参考URL「明清楽資料」<http://www.geocities.jp/cato1963/singaku-01.html> 参照。
14. 真田幸男氏によれば、由木康牧師はパスカルの研究家、クリスマス讃美歌「きよしこの夜」の訳詞者として知られ、聖学院校歌の作詞者でもある。一九八五年一月没。その数日後、宇野秀彌が、黒いネクタイ着用、愛用のベレー帽を被り、「由木先生にはたいへん可愛がられたのでこれから告別式に参ります」との言葉を残し校門を出た姿をはっきりと覚えているとされる。
15. 「なみだぶつ」には「私は同志と共に聖学院で教職員組合の結成に当り、その後長らく委員長を勤めている間に、＜日キ教組連＞の委員長にまつり上げられた。日キ教組連、日本キリスト教主義学校教職員組合連合は、キリスト教学校で結成された全国五十数組合の連合体である。あくまで労働組合ではあるが、進歩的とか民主的とかいう修飾語の付く牧師・教会・信者団体と深い連繋をもっている。したがって私は委員長時代、東京で開かれた様々な会合や、名古屋・京都・神戸・甲府・仙台・金沢等で開かれた会合にも出席して、組合員ばかりでなく各地のキリスト教界の人々に接して交った。このように私とキリスト教との関わり合いは長くまた広がったのであるが、魅力を感じつつもついにクリスチャンになることなく」と記されている。真田幸男氏によれば、聖学院中学校高等学校教職員労働組合長時代、日本キリスト教学校教職員組合連合の加盟組合であったため、機関紙編集、研修会、地区協議会の中で全国のキリスト教学校教職員との交流ができたとされる。また宇野秀彌は一九六〇年前後、教職員組合長として、定年制施行、退職金制度創設、教員の前歴計算の統一などについて、教職員の多様な意見を整理し理事会と強い交渉を経て確立させた。一九七一年から九年間高等部長（教頭職）を務め、学校長を補佐し、教務のリーダーとして教育活動の中心的存在で、教科、学級運営、生徒指導等で、後輩教師のよき相談者であり、

現在も重要な学校行事として続いている新入生合宿は宇野秀彌の発案であり、学校に多大な貢献をしてきた。その姿は当時の写真からも窺える。

16. 真田幸男氏によれば、私立東京高等女学校は現在の東京女子学園中学校・高等学校をさす。『東京女子学園一〇〇年史』には、橋本省三氏が明治四三年から二二年間同校の英語担当教員として勤務したことが記されている。東京女子学園一〇〇年史編集委員会編『東京女子学園一〇〇年史』二〇〇四、東京女子学園、二二二頁。
17. 宇野秀彌の曾祖母である松野ツナは伝田忠左衛門に嫁いだが、天保の頃、夫が失踪したため実家に戻っていた。その子供の中で三人とは縁をつないでいて、次男兼秋は塩川パン店を信州上田松尾町に経営、長女のチウは幼い頃、他家の養子になったが、松野家に逃げ戻った。
18. 増田竹次郎とチウの間に長女の菊栄のほか、年の離れて生まれた次女の知恵と長男の美正がいた。美正については、大正十五年十一月二八日に竹次郎が脳溢血で亡くなった時に中学二年生だったというから大正元年頃の生まれであることが推測される。松野家にはツナ一人残り、実子の兼秋はその妻の反対で松野家を継がず、良三を養子に迎え、外孫である知恵と縁組させた。
19. 『夏羽織 母菊栄を偲んで』四頁に松野良三は僅か四三歳で亡くなったとある。
20. 当時の西片町教会の牧師によると、その内容を記憶していないと回答があった。
21. 三河一帯は一向一揆と浄土真宗が盛んであり、宇野姓が多いことから、織田信長と対決した一向一揆の総帥、大坂石山本願寺の法主顕如上人の右筆で『宇野主水日記』を遺した宇野主水と何らかの縁があるのではないかと宇野秀彌自身が「なむあみだぶつ」で記しているが、詳らかではない。
22. 近年、宇野秀彌の翻訳に関して言及した論文として以下のものがある。西岡健治「【本邦初訳】韓国古典小説『李春風伝』一堪忍袋の緒が切れた朝鮮時代の妻の反撃一」『福岡県立大学人間社会学部紀要』第十八巻第二号、二〇一〇、九九頁。西岡氏の翻訳は異本のソウル大学所蔵「伽藍文庫本」をもとに行い、宇野秀彌訳には見られない、大団円で妻が夫に「この、大馬鹿野郎！」と言いのしるせりふが出てくるとしている。また이한정은自費出版物の代表として宇野秀彌の『朝鮮文学試訳』全七〇巻を挙げている。이한정「일본의 한국문학 번역서지 목록 (1945 ~ 2016)」한국학연구, 第四四輯、二〇一七、一一四頁。その他、岡山善一郎は、日本での韓国古典文学研究の現況と展望について韓国語で著述しているが、ここでも宇野秀彌の翻訳について紹介している。岡山善一郎「日本에서의 한국고전문학 연구 현황과 전망」『동아시아고대학』第三五輯、동아시아고대학회、二〇一四。宇野秀彌の翻訳自体は高く評価されるものの、『洪吉童傳』において、許均について嫡出だったにもかかわらず「庶

出であったために官途に就くことができなかった」とあり、姉の蘭雪軒を妹とするなど、冒頭解説の誤謬も見られる。翻訳そのものの緻密な評価については一度に言及することは不可能であり、今後の課題になると考えられる。

23. 『朝鮮文学試訳』に関する箇所は、山田恭子「明治期以降の朝鮮古典文学作品の和訳状況」『近畿大学法学』第六十一卷第二・三号大崎隆彦教授退任記念号、二〇一三年十二月、二四八～二五四頁の「宇野秀彌『朝鮮文学試訳』作品表」を参照した。
24. 鄭雅英氏は立命館大学経営学部教授で、二〇一二年に宇野秀彌が聖学院中学校高等学校での元同僚であったとの情報をいただいた。宇野秀彌について「温厚な知的紳士」であり、趣味で行っていた「朝鮮文学翻訳にかける熱意と豊富な知識量は圧倒的」とされた。
25. 聖学院中学校高等学校編『聖学院中学校高等学校百年史』聖学院中学校高等学校、二〇〇七年三月。筆者が二〇一二年の一月に聖学院中学校高等学校を訪れた際にいただき、この時偶然にも居合わせた桑ヶ谷森男氏から当時のお話を聞くことができた。
26. 写真を含め全資料公開に関しては全て所有者の許可をいただいた。